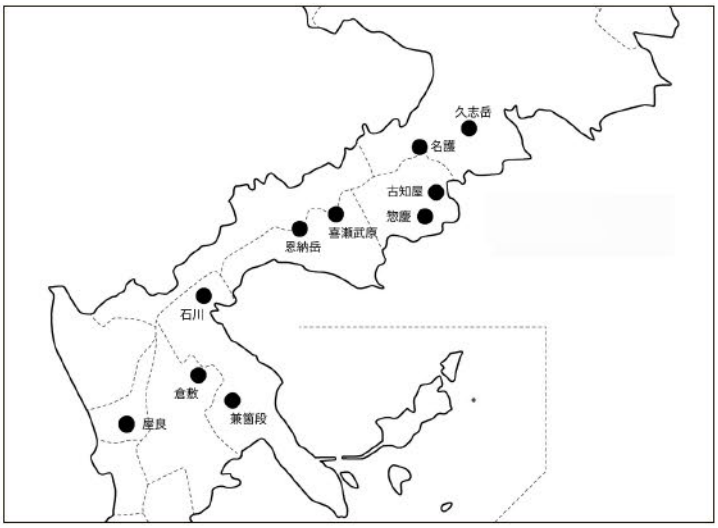
ら、夜が明ける」とあり、山中は相当冷え込んでいたことがうかがえます。このあとも4月下旬まで「寒い」という表現がいくつか見られ、空腹と眠れなかったことに加え、寒い中、山中で過ごさざるを得なかった様子がわかります。またこれは長尾さんたちだけでなく、ほかの日本兵や、山中で避難していた住民にとっても同じ状況であり、体が衰弱していく原因になったと考えられます。軍民が分離する形で避難していたわけでは全くなく、戦闘状態に住民が置かれ、戦争が長引けば長引くほど犠牲が増えていくことになりました。



長尾さん 移動地点(屋良～久志岳)

【食糧調達に難渋をきわめる】

恩納岳での負傷兵の運搬や、食糧運搬などの作業を行い、名護に向かう途中、4月16日に喜瀬武原に着きます。そこからさらに北へ向かいますが、「二時ごろ迄行軍 余り道がわからないので、キセン原にて夜を明か」します。17日は名護の近くまで移動することができますが、18日の記述では「体も大変弱った」とあり、疲労も極限状態だったことが推察されます。名護港に30隻ほど米軍船団を目にした長尾さんたちは宜野座村惣慶に移動、「避難民より飯を炊いて貰いおにぎりを一個」もらい、惣慶の山中に野宿します。そのあと、古知屋の民家で雨をしのぎ、食事をもらいます。「非常にお世話になる」「お世話になる」と住民への感謝がくりかえし綴られています。

北部への移動を開始してから約1か月、土地勘がない中、惣慶から久志山(岳)のふもとまで来ると、米軍の急襲を受け、長尾さんと同じ部隊の兵士が3人戦死します。これをうけて北部から首里へ目的地を変更したものの、山中で道に迷い、「3日米食せず体の気力なし」の状態で、再び喜瀬武原に着きます。なんとか野営地を民家に置き、食糧を探すものの、「朝食もイモばかり」、「米さがしに行くが米がない」「夜は部落にイモ堀に行く あまりいい芋なし」と食糧調達は芳しくありませんでした。しかし、運よくヤギ一頭を仲間が取って来て、「腹一杯食う」(5月12日)ことができたこともありました。

【米軍との交戦】

5月5日、日中、喜瀬武原から恩納岳へむけて移動するために、午前1時に出発します。その時、「途中道路にて戦車約3、40台」と遭遇との記述がありますが、この段階で東西に通る恩納村の道は米軍が占領し、南北に行き交うことが困難な状態になっていました。

5月14日の記述には「友軍が首里の近くまで押されている模様(中略)全般的には非常に優理(ママ:有利)らしい」とあります。しかし実際は日本軍の総兵力の約半分以上が戦死し、首里陥落も目前の状態でしたので、正確な情報が行き届いていなかったことがわかります。この頃「黒坊人(ママ)の敵が二名殺されていたので見に行く」(5月15日)。「昼頃になって敵三名射殺す」(5月16日)という記述もあり、長尾さんはじめ日本軍が恩納の山中において、疲労困憊ながら米軍と交戦していたことがわかります。また避難民がいる場所や空きの民家を利用しながら、毎日のように寝る場所を変えていました。恩納村本部落(おそらく字恩納と思われる)では区長はじめ、住民からの食糧提供があり、ここでも「大変お世話になる」という記述が出てきます。

(つづく)

(瀬戸)